

苦しき美しく夏

原民喜

青空文庫

陽ひの光の圧迫が弱まってゆくのが柱に凭掛よりかかっている彼に、向側むきにいる妻の微かすかな安堵あんどを感じさせると、彼はふらりと立上って台所から下駄をつっかけて狭い裏の露次へ歩いて行ったが、何気なく隣境の空を見上げると高い樹木の梢こずえに強烈な陽の光が帯のように纏まとわりついていて、そこだけが赫かつと燃えているようだった。てらてらとした葉をもつその樹木の梢は鏡のようにひっそりした空のなかで美しく燃え狂っている。と忽たちまちそれは妻がみたいつかの夢の極致のように彼におもえた。熱い海岸の砂地の反射にぐつたりとした妻は、陽の翳かげつてゆく田舎路いなかみちを歩いて行く。ぐつたりとした四肢ししの疲れのように田舎路は仄ほのぐら暗くなつてゆくのだが、

ふと眼を藁葺屋根わらぶきやねの上にやると、大きな榎えのきの梢が一ところ真昼のよう
に明るい光線を湛たえている。それは恐怖と憧憬どうけいのおののきに燃えてゆくようだ。
いつのまにか妻は女学生の頃の感覚に喚よび戻もざれている。苦しげな呻うめき声ごえから喚よび起おされて妻が語った夢は、
彼には途轍とてつもなく美しいもののおもえた。その夢の極致が今むこうの空に現あれている……。彼にとっては一度妻の脳裏かすを掠さら
めたイメージは絶えず何処どこかの空間に実在しているようにおもえた。と同時にそれは彼自身の広漠こうぼくとして心をそそる遠い過去の生前の記憶とも重なり合っていた。あの何か鏡のようにひっそりとした空で美しく燃え狂っている光の帯は、もしかするとあの頂点すべの方に総すべてはあつて、それを見上げている彼自身は儂はかない影では

なかるうか。……これを見せてやろう、ふと彼は妻の姿を求めて、露次の外の窓から家のなかを覗き込んだ。妻は縁側の静臥椅子に横臥した儘、ぼんやりと向側の軒の方の空を眺めていた。それは衰えてゆく外の光線に、あたかも彼女自身の体温器をあてがっているような、祈りに似たものがある。ほんの些細な刺戟も彼女の容態に響くのだが、そうしていま彼女のいる地上はあまりにも無惨に罅割れているのだったが、それらを凝と耐え忍んでゆくことが彼女の日課であった。

「外へ椅子を持出して休むといいよ」

彼は窓から声をかけてみた。だが、妻は彼の云う意味が判らな
いらしく、何とも応えなかつた。その窓際を離れると、板壁に

立掛けてあるデツキ・チエアーを地面に組み立てて、その上に彼は背を横よこえた。そこからもさきほどの、あの梢の光線は眺められた。首筋にあたるチエアーの感触は固かったが、彼はまるで一日の静かな療養をはたした病人のように、深々と身を埋めていた。

それに横よこわると、殆ほとんどすべての抵抗がとれて、肉体の疵きずも魂たまの疼うずも自みづから少すくしずつ医いされてゆく椅子——そのような椅子を彼は夢想するのだった。その純白なサナトリウムは瀨こ氣うきに満ちた山の中腹に建たっていて、空気は肺しに泌しみ入るように冷たいが、陽の光は柔かな愛撫あいぶを投なげかけてくれる。ここでは、すべての物の象しやうががつちりとして懐なつかしく人間の眼まなこに映うつってくる。どんな微細な症状もここでは限くまなく照らし出されるのだが、そのかわり細胞さいぼうの隅すみ々々

まで完膚なきまで治療されてゆく。厳格な規律と、行きとどいた設備、それから何よりも優しい心づかい、……そうしたものに取囲まれて、静かな月日が流れてゆく。人は恢復期かいふくきの悦びよろこに和らひとみぐ眸をどうしても向うに見える樹木の残映にふりむけたくなるのだ……。

今、あたりは奇妙に物静かだった。いつも近所合壁の寄合う場所になっっている表の方の露次もひっそりとして人気がひとけなかった。それだけでも妻はたしかに一ときの安堵に恵まれているようだった。そして、彼もまたあの恢復期の人のように幻の椅子に凭よりかかっていた。

彼等ら二人がはじめてその土地に居着いた年の夏……。その年の

夏は狂気の追憶のように彼に刻まれている。居着いた借家——それは今も彼の棲すんでいる家だったが——は海の見える茫ぼう漠ばくとした高台の一隅にあつた。彼はその家のなかで傷ついた獣のように呻しんぎん吟ぎんしていた。狭い庭にある二本の藜もちの樹の燃えたつ青葉が油のような青空を支ささえていて、ほど遠からぬところにある野づらや海はいきれがくらくらと彼の額に感じられた。朝の陽光がじりじりと縁側の端を照りつけているのを見ただけでも彼は堪たまらない気持をそそられる。すべては烈はげしすぎて、すべては彼にとって強すぎたのだ。しーんとした真昼、彼は暑あえさに喘あえぎながら家のうちの涼しそうなところを求めていたが、風呂場の流板の上に小桶こおけに水を満たすと、ものに憑つかれたようにぼんやりと視み入いった。小さな

器の水ながら、それは無限の水の姿に^{ひろが}拡^{ひろ}つてゆく。と彼の視野の底に肺を病んで死んで行つた一人の友人の姿が浮ぶ。外部の圧迫に細り細りながら、やがて^{ひんし}瀕死の眼に^{とら}把えられたものは、このように静かな水の姿ではなからうかと……。

奇怪な念想は絶えず彼につきまとつていた。午睡の^さ覚めた眼に畳の目は水底の^{しま}縞のように^{ぼおろげ}朧気に映る。と、黄色い水仙のようなものが、彼の眼の片隅にある。それは黄色いワン・ピースを着た妻であつたが、恐水病患者の熱っぽい眼に映る幻のようでもあつた。今にも息が^{とだ}杜絶えそうな観念がぎりぎり^{しず}と眼さきに詰寄せ^{しず}る。だが、妻はいつも彼の乱れがちの神経を穩かに^{しず}揺り鎮め、内攻する心理を解きほぐそうとした。どうかすると妻の眼のなかに

は彼の神経の火がそのまま宿っているように想えることもある。彼は不思議そうにその眸に視入った。と忽ち、もつと無心なものが、もつと豊かなものが妻の眸のなかに笑いながら溢あふれていた。無心なものは彼を誘って、もつと無邪気に生活の歡よろこびに浸らせようとするのだった。彼等が移つて来たその土地は茫漠とした泥海と田野につつまれていて、何の拠よりどころも感じられなかったし、一歩でも闕しきいの外に出ることは妙に気おくれが伴なうのだったが、それでも陽が沈んで国道が薄鼠色に変つてゆく頃、彼は妻と一緒によく外に出た。平屋建の黝くろずんだ家屋が広いアスファルトの両側につづいて、海岸から街の方へ通じる国道は古い絵はがきの景色か何かのようにおもえた。

（流竄^{りゆうざん}。そういう言葉が彼にはすぐ浮ぶのだ。だが、彼は身と自らを人生から流^る瀆^{たく}させたのではなかったか）

鍛冶屋^{かじや}の薄暗い軒下で青年がヴァイオリンを練習していた。往来の雑音にその音は忽ち掻消^{かきけ}されるのだが、ああして、あの男はあの場所にいることを疑われないもののようにだ。低い軒の狭い家はすぐ往来から蚊帳^{かや}の灯がじかに見透かされる。あのような場所に人は棲^すんでいて、今、彼の眼に映ることが、それだけのことが彼には不思議そのものであり微かに嗟嘆^{さたん}をともなった。だが、往来は彼の心象と何の関^{かかわ}りもなく存在していたし、灯の賑^{にぎ}わう街の方へ入ると、そこへよく買物に出掛ける妻は、勝手知った案内人のようにいそいそと歩いた。

彼はいつも外に出ると病後の散歩のような気持がした。海岸の方へ降る路で、ふと何だかわからないが、優しい雑草のおいを感じる、幼年時代の爽やかな記憶がすぐ甦りそうになった。だが、どうかすると、彼にはこの地球全体が得態の知れない病苦しさに満ち満ちた夢魔のようにおもえる。……幾日も雨の訪れない息苦しきがあるとき彼をぐったりさせていた。

「少し外へ出てみましょうか」

妻は夜更よふけに彼を外に誘った。一步家の外に出ると、白い埃ほこりをかむったトタン屋根の四五軒の平屋が、その屋根の上に乾ききつた星空があつた。家並が杜切とぎれたところから、海岸へ降りる路が白く茫くらと浮んでいる。伸びきつた空地の叢くさむらと白っぽい埃の路は星明

りに悶え^{もだ}斃^{うな}されているようだった。

その茫とした白っぽい路は古い悲しい昔から存在していて、何^ど処^こまでも続いているのだろうか。その路の隈々には人間の白っぽい骨が陰々と横わっている。歪^{ゆが}んだ掟^{おきて}や陷^{かんせい}穽^{せい}のために、磔^{たつけい}刑^{けい}や打首にされた無数の怨^{えん}恨^{こん}が今も濛^{もう}々^{もう}と煙^{えん}っている。無^む辜^この民を虐殺して、その上に築かれてゆく血まみれの世界が……その世界のはてに今この白い路が横わっているのだろうか。

その年の春、その土地へ移る前のことだが、彼は妻と一緒に特高課に検挙された。三十時間あまりの留置ですぐ釈放はされたが、その時受けた印象は彼の神経の核心に灼^やきつけられていた。得態の知れない陰惨なものが既に地上を覆^{おお}おうとしているのだった。

息苦しきは、白い路を眺めている彼の眼のなかにあつた。だが、
 暫く妻と一緒にそこに佇たたずんでいると、やはり戸外の夜の空気が少
 しずつ彼を鎮めていた。再び家に戻つて来ると、さきほどと違つ
 た、かすかな爽やかさが身につけ加えられていた。……こういう
 一寸した気分の転換を彼の妻はよく心得ているのだ。それで、
 彼は母親にあやされる、あの子供の気持になつてゐることがよく
 ある。

粗末な生垣いけがきで囲まれた二坪ほどの小庭には、彼が子供の頃見
 憶おぼえて久しく眼にしなかつた草花が一めんはびこに蔓つていた。露草、
 鳳仙花ほうせんか、酸漿ほおずき、白粉花おしろいばな、除虫菊……密集した小さな茎の根
 元や、くらくらと光線を吸集してうなだれている葉裏に、彼の眼

はいつもそそがれる。とすさまじい勢で時が逆流する。子供の時
そういうものを眺めた苦悩とも甘美とも分ちがたい感覚がすぐそ
こにあり、何か密画風の世界と、それをとりまく広漠たる夢魔が
入り混っていた。それは彼の午睡のなかにも現れた。ぐったりと
頭と肩は石のように無感覚になっいて、彼の睡ねむっている斜横の
方角に、庭の酸漿の実が見えてくる。ほおずきの根元が急に嶮けわし
く暗くなつてゆくと、朱あかい実が一きわ赤く燃え立つのが、何か悪
い予感がして、それを見ていると、無性に堪たまらなくなる。彼は子
供の頃たしかにこれと同じような悪寒おかんに襲われていたのをぼんや
り思い出す。と、その夢とはまた別個に、彼の睡っている眼に、
膝ひざこぶしの一部が巨大な山脈か何かのように茫と浮び上る。見る

と、そこは確か先日から小さな腫物はれものができて、赤くはれ上つていたのだが、今そこが噴火山となつて赤々と煙を噴き上げている。二つの夢が分裂したまま同時に進行してゆく状態が終ると、彼は虚脱者のように眼を見ひらいていた。陽はまだ庭さきにギラギラ照つていたが、畳の上には人心地ひとごころを甦よみがえらすものがあつて、そのなかに黄色のワン・ピースを着た妻の姿があつた。彼は柱に凭掛つて、暫く虚脱のあとを吟味していた。あのような奇怪な夢も、それを妻に語れば、殆ど彼等は両方でみた夢を語り合つていたので、彼女はすぐ分つてくれそうであつた。だが、彼はふと、いつも鈍きつさきのように彼に突立はつてくるどうにもならぬ絶望感と、そこから跳ね上ろうとする憤怒ふんぬが、今も身裡みうちを疼くのをおぼえた。殆ど

祈るような眼つきで、彼は空間を視つめていた。と、遠い昔の川遊びの記憶がふと目さきにちらついて来る。故郷の澄みきった水と子供のあざやかな感覚が静かな音響をともないながら……。

「こんな小説はどう思う」彼は妻に話しかけた。

「子供がはじめて乗合馬車に乗せてもらって、川へ連れて行ってもらう。それから川で海老えびを獲とるのだが、瓶びんのなかから海老が跳ねて子供は泣きだす」

妻の眼は大きく見ひらかれた。それは無心なものに視入つたり憧あこがれたりするときの、一番懐しそうな眼だった。それから急ほとぼしに迸ほとぼしるような悦びが顔一ぱいにひろがった。

「お書きなさい、それはきつといいいものが書けます」

その祈るような眼は遙か遠くにあるものに対つて、不思議な透視を働かせているようだった。彼もまた弾む心で殆ど妻の透視しているものを信じてもいいとおもえたのだが……。

彼の妻は結婚の最初のその日から、やがて彼のうちに発展するだろうものを信じていた。それまで彼の書いたものを二つ三つ読んだだけで、もう彼女は彼の文学を疑わなかった。それから熱狂がはじまった。さりげない会話や日常の振舞の一つ一つにも彼はその方向へ振向け、そこへ駆り立てようとするのが窺われた。彼は若い女の心に転じられた夢の素直さに驚き、それからその親切に甘えた。だが、何の職業にも就けず、世間にも知られず、ひたすら自分ひとりで、ものを書いて行こうとする男には、身を研り

さいなむばかりの不安と焦躁しやうそくが渦巻いていた。世の嘲笑ちやうしやうや批難に堪えてゆけるだけの確乎かっこたるものはなかったが、どうかすると、彼はよく昂然こうぜんと、しかし、低く眩つぶやいた。

「たとえ全世界を喪うしなおうとも……」

たとえ全世界を喪うしなおうとも……それはそれでよかった。だが、眼の前に一人の女が信じようとしている男、その男が遂ついにに何ものでもなかったとしたら……。

彼にとつて、文学への宿願は少年の頃から根ざしてはいた。が、非力で薄弱な彼には、まだ、この頃になつても殆ど何の世界も築くことができなかつた。世界は彼にとつては恐怖と苦悶くもんに鎖とぎされていた。が、その向側に夢みる世界だけが甘く清らかに澄んでい

た。妻は彼の向側にあるものを引き寄せようとしているのかもしれない。彼はそのような妻の顔をぼんやりと眺める。するとむしろ、妻の顔の向側に何か分らないが驚くべきものがあるようにおもえた。

その年の夏が終る頃から、作品は少しずつ書かれていた。外部の喧騒けんそうから遮断しやだんされたところで読書と冥想めいそうに耽ふけることもできたが、彼はいつも神経を研り刻むおもいで、難澁を重ねながらペンをとった。……このようにして年月は流れて行つた。だが、外部の世界と殆ど何の接触もなく静かに月日を送っていることは、却かえつて鋭い不安を搔かきたてていた。天井の板が夜ことりと音をたてただけでも、彼の心臓をどきりとさせたし、雨戸の節穴から差

してくる月の光さえも神経を青ざめさせた。

それからやがて、あの常に脅かされていたものが遂にやって来たのだ。戦争は、ある年の夏、既にはじまっていた。彼はただ頑な姿勢で暗い年月を堪えてゆこうとした。が、次第に彼は茫然として思い耽るばかりだった。幼年時代に見た空の青かったこと、水の澄んでいたこと、そのような生存感ばかりが疼くように美しかった。茫然としてももの思いに耽っている彼を、妻はよくこう云った。

「エゴのない作家は嫌きらいです。誰が何と云おうとも、たとえ全世界を捨てても……」

そういう妻の眼もギラギラと燃え光っていた。澱よどみやすい彼の気分を搔きまぜ沈む心をひき立てようとするのも彼女だった。それから妻は茶の湯の稽古けいこなどに通いだした。だが、その妻の挙動にも以前と違ういらだちが滲にじんで来た。

「淋さびしい、淋しい、何かお話して頂ちようだい戴だい」

真夜なかに妻は甘えた。二人だけの佗住居わびずまいを淋しがる彼女ではなかったのに、何かの異常なものの予感に堪えきれなくなったらしい。だが、それが何であるかは、彼にはまだ分らなかった。

その悲壯がやって来たのは、もう二年後のことだった。夏の終り頃、彼は一人で山の宿へ二三泊の旅をしたが、殆ど何一つ目も心も娯たのしますものがないのに驚いた。山の湖水の棧橋に遊覧用の

モーター・ボートが着く。青い軍服を着た海軍士官の一隊が——彼の眼には編笠あみがさをかむつて珠数じゆずつな繋ぎになつてゐる囚人の姿に見えてくる。こうした憂鬱ゆううつに沈みきつて、悄しやうぜん然とむなしい旅から戻つて来た。家へ戻つてからも彼は己れおのと己れの心に訝いぶかしながら佗しい旅の回想をしていた。

そうした、ある朝、彼は寢床で、隣室にいる妻がふと哀かなしげな咳せきをつづけているのを聞いた。何か絶え入るばかりの心細さが、彼を寢床から跳ね起させた。はじめて視るその血塊は美しい色をしてゐた。それは眼のなかで燃えるようにおもえた。妻はぐつたりしてゐたが、悲痛に堪えようとする顔が初うい々しく、うわずつてゐた。妻はむしろ気軽とも思える位の調子で入院の準備をしだ

した。悲痛に打ちのめされていたのは彼の方であつたかもしれない。妻のいなくなつた部屋で、彼はがくとうずくま蹲り茫然としていた。世界は彼の頭上で裂けて割れたようだつた。やがて裂けて割れたものに壮烈が突立つていた。

病院に通う路上で、赤とんぼの群が無数に一方の空へ流れてゆくのを視て、彼はひとり地上に突離されているようにおもえた。

燃えて行つた夏、燃えて行つた夏……彼は晩夏のうつとりとした光線にみとれて、口くちずさ誦んだ。夏はまだいたるところに美しく

燃えたぎっているようであつた。病院の入口の庭ではカンナが赤く天をめざして咲いていた。病室のベッドのなかで、妻は赤らんだ顔をしていた。その額は大きな夏の奔騰のように彼におもえた。

やがて彼には周囲の殆どすべてのものが熱っぽく視えて来た。それは病苦と祈りを含んだ新しい日々のものであった。「どうなるのでしよう」と妻の眼はふるえる。彼も突離されたように、だが、その底で彼は却って烈しく美しいものを感じた。彼はとり纏すがるようにそれに視入っているのだった。

その後、妻が家に戻つて来て、療養生活をつづけるようになってからも、烈しく突き離されたものと美しく灼やきつけられたものが、いつも疼うずいていた。この時を覗ねらうように、殺氣立った世の波は彼の家に襲つて来た。家政婦は不意に来なくなり、それからその次に雇った女中は二日目にものを盗んで去つた。彼はがくんと蹲り祈りと怒りにうち震えた。その次に通いでやって来るように

なつた女中は何事もなく漸くこの家に馴れて来そうだった。

それから少しずつ穏かな日がつづいた。いつも彼の皮膚は病妻の容態をすぐ側で感じた。些細な刺戟も天候のちよつとした変動もすぐに妻の体に響くのが、脆弱い体質の彼にはそれがそのまま自分の容態のようにおもえた。無限に繊細で微妙な器と、それを置くことの出来る一つの絶対境を彼は夢みた。静謐が、心をかき乱されることのない安静が何よりも今は慕わしかった。……だが、ある夜、妻の夢では天上の星が悉く墜落して行つた。「県境へ行く道のあたりです。どうして、あの辺は茫々として

いるのでしよう」

妻はみた夢に脅え訝りながら彼に語つた。その道は妻が健康だ

った頃、一緒に歩いたことのある道だった。山らしいものの一つも見えない空は冬でもかんかんと陽ひが照りわた亘り、干乾らびた轍わだちの跡と茫々とした枯草が虚無のようにひろが拮ひろがつていた。殆ど彼も妻と同じ位、その夢に脅えながら悶もだえることができた。妖あやしげな天変地異の夢は何を意味し何の予感なのか、彼にはほんやり解わかるようにおもえた。だが、彼は押黙つてそのことは妻に語らなかつた。：寝つけない夜床の上で、彼はよく茫然と終末の日の予感にのいた。焚たきつけ附つけを作るために、彼は朽木に斧おのをあてたことがある。すると無数の羽根蟻はねありが足許あしもとの地面を匍はい廻まわつた。白い卵をかかえて、右往左往する昆こんちゆう虫はそのまま人間の群集の混乱の姿だった。都市が崩壊し暗黒になってしまっている図が時々彼の夢に

は現れるのだった。

妻はきびしい自制で深い不安と戦いながら身をいたわっていた。静かに少しずつ恢復へ向っているような兆きざしも見えた。柔かい陽ざしが竹の若葉にゆらぐ真昼、彼女は縁側に坐すつて女中に髪を梳すかせていた。すると彼には、そういう静かな時刻はそのまま宇宙の最高の系列のなかに停止してしまっているのではないかと思える。気分のいい日には、妻は自然の恵みを一人で享うけとっているかのように静臥椅子で沈黙していた。すべて過ぎて行つた時間のうち最も美しいものが、すべて季節のうち最も優しいものだけが、それらが溶けあつて、すぐ彼女のまわりに恍こう惚こつと存在している。

そういう時には彼も静臥椅子のほとりでぼんやりと、しかし熱烈に夢みた。たとえ現在の生活が何ものかによって無惨に引裂かれ、るとしても、こうした生存がやがて消滅するとしても、地上のいとなみの悉くが焼き失せる日があるとしても……。

(昭和二十四年五・六月合併号『近代文学』)

青空文庫情報

底本：「夏の花・心願の国」新潮文庫、新潮社

1973（昭和48）年7月30日初版発行

入力…tatsuki

校正：林 幸雄

2002年1月1日公開

2006年2月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

苦しく美しき夏

原民喜

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>